

オーストラリア・木曜島に渡った日本人の足跡を追う

— 藤井富太郎氏の生涯から考える —

伊 井 義 人 青 木 麻衣子

Abstract

Thursday Island, located to the far northeast of Australia and made famous in Japan by Shiba Ryotaro's novel "Mokuyo-To no Yakai" (the night meeting on Thursday Island), once had a population consisting of 60% Japanese. In the Meiji period, in particular, many youths from the coastal area of Wakayama travelled to Thursday Island with the dream of striking it rich as a pearl diver. Although production gradually decreased, the pearl industry on Thursday Island continued to operate through to the Pacific War. However, at the outbreak of the war, most residents from Japan or of Japanese descent were confined in internment camps on the Australian mainland, and those without family in Australia, were forcibly repatriated to Japan after the war. Now, only a few families of Japanese descent remain living on Thursday Island, and it seems that the memory of the time when many Japanese emigrants lived on the island is fading. In this study, our aim is to gain a detailed understanding of the "perspective" of the Japanese emigrants on Thursday Island via an analysis of historical documents and previous studies. Further, we aim to show the multi-faceted and 3-dimensional nature of the lives of the Japanese emigrants on the island before and after the Pacific War by superimposing this "perspective" onto the individual life of Tomitaro Fujii.

1. 本稿の目的

オーストラリアには、かつてその居住者の大半を日本人が占めた島がある。「木曜島」(Thursday Island)という名で親しまれるその島は、オーストラリア本土とパプア・ニューギニアの間に点在する島々、トレス海峡島嶼地域の行政の中心地である。現在、同地域の人口の大半を占める先住民であるトレス海峡島嶼民は、もともとメラネシア系の人々が海上交易を通してこの地に永住したといわれている。しかし、19世紀後半以降の真珠貝・高瀬貝・なまこ採取業によるアジア、南太平洋地

域等からの労働力、キリスト教の布教とそれに伴う植民地行政の導入によるヨーロッパ移民の流入は、同地域の人々の言語・文化的多様性の涵養に大きな影響を与えてきた¹。

ガンター (Ganter, R.) によれば、1900 年前後の木曜島では、日本人居住者数の急増が著しく、わずか数年の間に、その数は全居住者数の半数近くを占めるに至ったという²。しかしながら、今ではその「痕跡」は、おびただしい数の墓を擁した日本人墓地以外にはほとんどない。海の仕事は「男の仕事」であり、单身渡豪したもの、太平洋戦争により帰国を余儀なくされたため、1945 年以

¹ 松本博之「アラフラ海の真珠貝に関する覚書——世界資本主義システムの水面下で——」大阪教育大学地理学教室『地理学年報』第 35 号、2001 年、1～31 頁。

² Ganter, R., 'Images of Japanese Pearl-Shellers in Queensland: An Oral History Chapter in Australia-Japan Relations', *Royal Historical Society of Queensland Journal*, Vol. XIV. No. 7, 1991.

降、そもそもこの地に戻ることでできた日本人・日系人は少なかった。また、真珠貝産業の衰退により、この地を訪れる日本人も時代とともに減少していった。筆者らが2001年に、自身の専門であるオーストラリアの教育政策・制度研究を主目的として最初にこの地を訪問したときにはすでに、同島で日本語を話す住民は日本人1名、日系二世1名の計2名に過ぎなかった。その1名も一昨年他界し、かつてこの地に日本人が築いた歴史を知る人々の高齢化も進むなかで、筆者らは、日本人・日系人の生きた記憶が徐々に薄れていくとの感覚をもつようになった。

だが、この「薄れていく」という表現は、果たして適切であろうか。いわば外からの「訪問者」である筆者らが、かつての時代を懐かしむような感覚を抱くのは、一種の感傷に過ぎないかもしれない。日本語を話す人の数さえ少ないが、この地にとどまった人々やその家族は、自らの立場にしたがって日本とのつながりを整理し、維持してきたとも考えられる。われわれソトモノが目している時代の移り変わりは表面的で、日本語を話す人さえ少ないものの、この地に残った人やその家族は、自らの立場や視点から、日本との長く細い関係を維持し続けてきたのかもしれない。

本稿は、筆者らのこのような問題意識を背景に、木曜島における日本人移民・日系人社会に関する研究の手始めとして、かつて当地で名ダイバーとして名を馳せ、司馬遼太郎が小説『木曜島の夜会』の主人公のモデルとした藤井富太郎氏に焦点を当て、彼が生きた時代を、現存する文献記録・資料および先行研究をもとに追跡・検討する³。近年、日本人移民・日系人に関する研究は、対象地域・時代ともに拡がりを見せている⁴。しかし、オーストラリアを対象としたものは、戦争関連のものを除けばごくわずかに過ぎない。戦後、和歌山県や串本町等、移民を多く輩出した自治体が主体となり移民史等が編纂されたが時期もあったが、そのような取り組みも移民および関係者の高齢化と

ともに減少し、現在ではその記憶を残す術も失われつつある。そのため、このような資料的制約を克服し、オーストラリアの日本人移民・日系人研究に新たな一石を投じるには、個人史からの振り返り等、新たな方法論の模索が必要である。

また、これまでオーストラリア、特に木曜島における日本人・日系人の「歴史」は、かれらの滞在期間が比較的短かったとの背景から、常に一つの「全体」として語られることが多かった。本稿では、藤井富太郎氏「個人」の人生を振り返ることを通して、彼が生きた「時代」を考えてみたい。より端的に述べれば、筆者らは、彼の生涯を通して、日本人・日系人の日本へのまなざし、また日本とのつながりを考えることが、われわれがいわば自明視してきた人間の自己肯定のあり方の複雑さに目を向け、ミクロな観点から歴史を再読する可能性をもつものと考えている。

本稿では具体的に、まず、現存する資料・先行研究の分析から、木曜島へ移住した日本人の「全体像」の抽出を試みる。そして、その全体像に藤井富太郎氏個人の人生を重ねあわせることによって、主に太平洋戦争前後の木曜島における日本人移民の生活を多面的かつ立体的に提示したい。

2. 木曜島に渡った日本人 ― その全体像

1) 木曜島における真珠貝採取業の盛衰と日本人移民

『和歌山県移民史』や『串本町史』等、木曜島への移民・移住について記録した資料・文献はいくつかある。しかし、そこに記される数値がいつも一致しているわけではない。一般的には、1883年に37人の日本人がトレス海峡島嶼地域の行政の中心地である木曜島に契約移民として渡豪したのが、同地への最初の日本人移民だといわれている。1890年代にはすでに木曜島における日本人移民の数は1,000人を上回り、木曜島全体の人口の約六割を占めるまでに増加した⁵。日本人は当時、「世

³ 本研究は、木曜島に居住する藤井家の方々から、かれらの父親である富太郎氏に関する調査を依頼されたことを出発点としている。2011年3月には、かれらに聞き取り調査も始めたが、その際、研究や報告に関する、同意書を筆者らと藤井家の方々（長女：タマヨ氏、長男：アキラ氏、次女：チヨミ氏）とで取り交わした。また、富太郎氏が残した写真および資料についての使用許可も得ている。

⁴ 例えば、足立伸子編著、吉田正紀・伊藤雅俊訳『ジャパニーズ・ディアスポラ』新泉社、2008年など。

⁵ 和歌山県『和歌山県移民史』1957年、192頁。

界一の真珠採りダイバー (the best pearl-shell divers in the world)」⁶ともいわれたが、これらのダイバーの多くは、和歌山県出身、特に西牟婁郡潮岬、串本、田並、有田、和深、江住出身の若者であった。

しかし、1901年の「移民制限法 (the Immigration Restriction Act)」により有色人種の入国が制限されるようになると、このような移民の流れにも陰りが生じた。1903年にオーストラリア政府が自由移民の渡航を禁止し、契約移民のみに入国が許可されようになると、日本人が船を所有し、真珠貝採取業の経営に携わることも禁止された⁷。そのため、それ以後移住を希望する新規参入者は、ダイバーの縁故による「呼び寄せ」による渡豪が主流となった。

第二次世界大戦後は、それ以前から問題とされてきた真珠貝の漁獲量減少や、ボタン生産のプラスチックへの移行から、日本人ダイバーが活躍する機会は激減した。ただし、「ミキモト」に代表されるように、真珠養殖場を金曜島やケーブ岬等に築き、新たに真珠産業を打ち立てた日系企業も存在した。当時、漁獲量の減少に危機感をもっていた関係者は、この養殖業の進展に新たな希望を見出し、雇用の創出も図られると期待していた⁸。しかし、1969年3月にトレス海峡島嶼地域内でオイルタンカーが座礁し、海にオイルが流出する事件が起きると、真珠養殖場もその影響を受け、この災害から立ち直ることが困難であると判断された。その結果、1970年代前半には多くの養殖場が閉鎖された。現在では、木曜島の隣の金曜島に日本人が運営する養殖場があるのみとなった。

2) 和歌山県出身者を惹き付けた木曜島

『和歌山県移民史』によれば、木曜島への移民は、「太平洋戦争への影響のいまだ少なかった昭和11年の郡市別海外在留者調によると…(中略)…、豪州へは西牟婁郡の424人、東牟婁郡の395人、新宮市の133人が多い⁹」と記されている。和歌山

県出身者は、なぜこれほどまでに木曜島への出稼ぎに魅力を感じたのであろうか。その理由を考える上で、以下の文章は興味深い¹⁰。

西牟婁郡江住村から以東新宮市に至る沿岸諸村がその中心地帯をなしている。移民の動機はまづこれらの地帯では人口に対して耕地が少ないことが挙げられる。しかし人口に対する耕地の狭少は山間諸村にも共通に見られる所であるが、移民が山間諸村に少なく、これ等の臨海諸村に多いのは漁業を通じて育てられた渡海の安易感であり、先輩の刺激誘導によるところが多く、つまり経済的、心理的、歴史的要因が同時に作用する結果である。

ここでは、第一に人口に対する耕地面積の少なさ、第二に相対的に山間部よりも海岸部出身者の移民が多かったことから、海への抵抗感のなさがあげられている。しかし、耕地面積の少なさや海への親和性をもった場所というのは、和歌山県だけではない。全国各地に、程度の差こそあれ、このような場所は点在する。

また、経済的要因のみが移民を決意させたのではないと指摘する研究もある¹¹。そこでは、経済的困窮に加え、「近隣の知人友人がすでに外国で成功している」ことによる隣接刺激や、「みんなが外国へ働きに行くから」等の隣接勧誘等が理由としてあげられている¹²。統計的にも、周囲の親戚や知人を頼り木曜島に渡るという習慣は、1930年代以降、その存在が確認される。

ただし、単に成功例だけが拡まっていたわけではない。故郷に錦を飾った例もあるものの、無一文で帰郷せざるを得なかった例、そして最悪の場合、命を落とし故郷の地を再び踏むことがかなわなかった例も無数に存在した。

3) 木曜島での生活

1890年代、木曜島の日本人人口がすでに1,000

⁶ Ganter, R., *op. cit.*, 1991.

⁷ ただし実質的には、名義貸し等によりその多くが日本人の手に掌握されたままであったことも指摘されている。

⁸ Thursday Island State High School, *Pearling in the Torres Strait: A collection of historical articles*, 1986, p.31.

⁹ 和歌山県、前掲書、112頁。

¹⁰ 藪内芳彦和『和歌山県新誌』昭和26年。および和歌山県、前掲書、125頁

¹¹ 岩崎健吉「紀伊半島南海岸に於ける海外出稼移民の研究 (第1報)」『地理学評論12-7』、1936年、21頁。

¹² 岩崎健吉「紀伊半島南海岸に於ける海外出稼移民の研究 (第2報)」『地理学評論13-3』、1937年、6～9頁。

名を上回っていたことは先に言及したが、その大部分は男性であった。当時の木曜島は、まさに男社会だったのである。それはダイバーという職種が男性に適していると考えられていた時代背景によるところもあるだろう。しかし、下記の文章は、実情がそれほど単純ではなかったことを示している¹³。

男女比はまた移民先の地域によつて著しい特色を帯びている。…。…アラフラ海における採貝移民のように業務そのものが安定性を欠いている上に、甚だしく季節の影響をうける地方ではせつかく女子を同伴しても恵まれた家族的生活を営む機会が乏しいからである。これに反しブラジル移民は主に農業移民であり移民そのものが最初から定着生活を目的とする構想の下に行われた計画移民であるのである。

ここから、男性の単身移住の要因として、単なる職種にのみよるのではなく、経済面を含む日常生活の不安定さが、女性だけでなく家族単位の移住を妨げたことが明らかである¹⁴。つまり、木曜島での生活は、ダイバーを志す男性にとっては安定を求めるものではなく、日本では稼ぐことができない大金を得ることを夢に見つつ日々の生活を過ごしていたと想像できる。そのため、木曜島の滞在期間の長短にかかわらず、多くの日本人にとって、ここでの生活は「日常」ではなく、「非日常」であった。ガンターはこれを、次のように記している¹⁵。

真珠貝産業に従事する日本人は、オーストラリアで新たな生活を創造しようとはしていなかった。彼らの第一の関心事は、故郷とそこにいる家族にあった。できる限りお金を稼い

で早く日本へ帰るという動機は、日本人の名声を、働き者の人々として高めていった。彼らの多くは、家族を支援するためにお金を送金していた。

木曜島に住む日本人の多くは、常に日本を向きながら、日本に住む家族の生活を維持することを目的としていたのである。

とはいえ、かれらの生活がまったく個人主義的だったわけではなく、木曜島にも特定の目的をもって意図的に構築された「日本人コミュニティ」は存在した。それが、日本人会・青年会であった。木曜島日本人会は1912（大正元）年に設立され、続いてその下部組織である青年会が出身郷土別に結成された。これらの組織は、主として「相互の連絡、親睦をはかりまたその利益を擁護する」¹⁶のを目的としたが、日本人という繋がりとともに、「自らの出身地」という絆を母体とする組織であった点は興味深い。特に青年会は、地縁ひいては血縁を重視する間柄である。次の文章は、それらの組織の役割を考える上で興味深い視点を提供している¹⁷。

…この日本人会なるものは外交上の問題やその団体関係の事務を執行するのが重なる目的であつて、われわれの青年会とは聊か異なつているのであります。われわれは異国にあつて、何等修行する師表と仰ぐものがない。明治も大正と改つて早や3年、この第二の国家を背負う責任ある青年は大いに努めねばならない時、ここに異域にあつて相互に研鑽する機関としてこの青年会であります。ここに海外人に対し日本人としてこの名誉を汚さないため、立派な宇久井村民、立派な和歌山県人、立派な日本国民としての修行のためにこの青年会を起したのであります。

¹³ 和歌山県、前掲書、116 頁。

¹⁴ しかし、同時に「醜業婦」の存在を認める記録も残されている。それによると、総数が200～300人に及んだ時期もあったとのことだが、その存在は明治期からすでに問題視されており、1892年には外務大臣に陳情書が送付されている。（鈴木明美「オーストラリアにおける日本人移民史——初期移民 柏木坦の事例をもとに——」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第9号、2008年）なお、筆者らが数年前、木曜島にあった銭湯の跡を探していた際、ある日系人に場所を尋ねたところ、あまり「いい顔」をされなかったのは、このような職業女性の存在を思い出させたのかもしれない。

¹⁵ Ganter, *op. cit.*, p.270

¹⁶ 和歌山県、前掲書、587 頁。

¹⁷ 木曜島宇久井青年会会則については、和歌山県、同上書、594 頁。

すなわち、日本人会・青年会の役割として、第一に、異国の地で生活する上での事務的な手続きの執行がある。これは、入出国手続きや雇用主との諸手続きも含まれると想定される。公的な記録はないが、当時、移民の大部分は、特に渡豪前に英語に熟達していたとは考えにくい。また、日本語についても、この時代に読み書きがどの程度できたのかは定かではない。そのため、このような手続きを代替してくれる組織の存在は、かれらにとって必要不可欠であったに違いない。

また第二に、〇〇村民、××県民、そして日本人としての意識、誇りの涵養に貢献した。木曜島の日本人の多くは、若い青年であった。本稿の主人公である藤井富太郎氏も、18歳で木曜島に渡っている。そのため、人材育成組織としての日本人会・青年会が求められたとしても不思議ではない。

しかし、このような日本人、同郷人同士のつながりも、第二次世界大戦の勃発およびそれによる強制帰国もしくは収容により、根底から崩されていくこととなる。戦後、木曜島に戻った日本人とその家族、日系人は38人であったと報告されているが¹⁸、そのなかで日本で生まれた日本人は、藤井富太郎氏ただひとりであった。現地の女性と結婚し、すでに子どもをもうけていた富太郎氏は、仲間が日本へと帰国する道を選ぶなか、ひとり木曜島へ戻り、79歳でその生涯を終えるまで、家族とともにその地に滞在した。

そこで次に、藤井富太郎氏の生涯を、藤井家から提供された資料や、彼について書かれた文献や手記から振り返る。そして、彼の個人史を、上記した日本人移民の全体像に照らして、当時の時代状況をより立体的に浮かび上がらせたい。

3. 藤井富太郎氏の生涯

藤井富太郎氏（以下、富太郎氏と略）は1907年に和歌山県西牟婁郡有田村で生まれた。この地域は、先に示したとおり、和歌山県の中でも多くの木曜島移住者を輩出した地である。多くの青年がそうであったように、富太郎氏も、一足先に木曜

島で働いていた兄の後を追って、18歳で木曜島へ移住した¹⁹。また、しばらくして、実弟の寿一氏も、彼を頼り木曜島へ渡っている。この点では、他のダイバーと同様に、富太郎氏も隣接刺激、隣接勧誘から木曜島への移住を決意したと推測できる。

富太郎氏も多くの日本人移民と同様に、最初からダイバーとして雇われていたわけではない。炊事係として船に乗り始めたが、1983年に結婚するころには、すでに「正ダイバー」として働いていた。ダイバーを経験せずして帰国した若者も少なくなかったが、彼は名ダイバーとして活躍した。しかし、第二次世界大戦の勃発とともに、富太郎氏は、仲間とともに、本土ニューサウスウェールズ州内陸部のヘイ収容所に収監された。戦後、木曜島に戻り、1961年にはオーストラリア（英国）の国籍を取得した。

富太郎氏の転機となるのは、1976年の司馬遼太郎氏による小説『木曜島の夜会』の発表であろう。これにより、藤井富三郎として登場した富太郎氏の名は、最後の真珠採取ダイバーとして一躍有名となる。これ以降、雑誌や週刊誌等にも木曜島の記事が掲載され、特に彼の死後、藤井家の歴史や状況がたびたび扱われることとなる。

二年後の1978年には、受勲のため、1925年に木曜島に渡ってから、初めての帰国を果たす。この帰国は、故郷の串本にも錦を飾った。しかし、木曜島に戻った翌年には、妻ジェセフィンさんが亡くなり、その時期から日本人合祀慰霊塔建設に尽力した。富太郎氏は、1986年に79歳で、木曜島で亡くなった。現在、次女であるチヨミさんの自宅の敷地内には、富太郎氏の銅像が設置されているが、『木曜島の夜会』を手により訪れる日本人が、この銅像の前で足を止める姿も見られる。

ここでは、文献記録・資料等から、富太郎氏個人の生涯を、特に彼の仕事、生活や価値観に注目して具体的に述べたい。

1) ダイバーとしての生活

富太郎氏は、シンクレアー社で働いた後、BPワ

¹⁸ Yuriko Nagata, 'Japanese-Australians in the Post-war Thursday Island Community', *Queensland Review: Asians in Australian History*, Vol.6. No.2, 1999, pp.30-40.

¹⁹ 前川健次「トミー・フジイ（藤井富太郎）：木曜島のダイバー：危険な海底で真珠貝追う」『日本人の足跡一：世紀を超えた「絆」求めて』産経新聞社、2001年、466頁。

イベン社に所属していた。ワイベンとは、トレス海峡島嶼民が示す木曜島の名称であり、「水の無い島」を意味する。同社では、セプトン号の借船ダイバーとして勤務した。セプトン号のような深水ボートは行動範囲も広く船上での生活も長くなるため、それぞれダイバーの出身地をもとに作られたハウスごとに行動した。富太郎氏は、串本ハウスの「リーダー格」であった²⁰。木曜島には、串本ハウスのほかにも、上野ハウス、周参見グループ、三輪崎ハウス等、和歌山県の西（東）牟婁郡の各地域のハウスがあり、互恵・ライバル関係にあったといえる。富太郎氏の串本ハウスには、1941年の段階で39名の所属員がいた²¹。

ダイバーボートは、一般的に、8人もしくは6人で構成された。8人乗りにはダイバー2人、6人乗りにはダイバー1人が乗船した。富太郎氏は、「船主であり、本ダイバー（責任ダイバー）として自分自身潜っていた。大変優れたダイバーとして知られていた」²²。「優秀なダイバーの条件は、沈着、冷静な精神力と、的確な判断力を備え、運動神経が良く、且つ水圧に耐え得る強健な身体が必要であるが、藤井富太郎はこれらをすべて満たした男であった」という²³。

本ダイバーは、そのダイバーボートの売り上げだけではなく、航路の開拓等、その一切についての責任を負わなければならなかった。木曜島およびトレス海峡島嶼地域近郊では、すでに1930年代後半には真珠貝の収穫量が下火となり、オーストラリア中北部海岸線まで遠征しなければならない状況にあった。富太郎氏も、1937年春に、南洋庁パラオ島を基地としていた日本の真珠貝採取船団がアラフラ海東部海域で新漁場を発見し、大量の真珠貝を収穫しているというニュースを聞くや、「三か月分の燃料、食糧、その他用品を積み込み、木曜島西方十二哩のブウビー島灯台からアーネムランド半島東北端のウェッセル島に向かって出

発した」²⁴という。

また、このような航海では、ダイバーは常に危険と隣り合わせであった。以下に示すように、当時、ダイバーは高収入が期待できると同時に、事故の多い危険な職業であることがすでに人々に広く認識されていた²⁵。

家を出るとき親から「ダイバーと博打はするな。」といわれていた。それだけ当時のダイバーは事故にあった。…。ダイバーになると、当時（引用者注：1935年前後）の学校の校長先生ぐらいの収入があって七十円だった。

富太郎氏も、彼を頼って木曜島へ渡り、彼同様に腕の良いダイバーであった弟の寿一氏を、1938年に事故で亡くしている。「モノゴトにあまり動揺しない」富太郎氏も、「このときは男泣きに崩れた」という²⁶。1938年といえば、奇しくも彼が結婚した年でもあるが、弟の死も、富太郎氏を木曜島にとどめる大きな理由となったのかもしれない。弟、寿一氏は、今も木曜島の墓に眠る。

2) 仲間との関係・木曜島での生活

富太郎氏は、ダイバーとしての生活のなかで、どのようなことに価値を置き日々の生活を送っていたのであろうか。ここでは、その一端を垣間見ることができる文章から、彼の生活をのぞいてみたい。まず、金銭感覚であるが、下記に引用したとおり、「豪快」であったらしい²⁷。

「金は何時でももうけられる……。他社のダイバー達を大きく引き放す収穫を年々続け、もうけた金は気前よく使って悔を残さなかった人で、他人には接待しても、されることを好まなかった。金放れがよく、男振りの良い

²⁰ 城谷勇「トレス海に生きた日々」『歴史と民俗 ありだ』第5号、12頁。

²¹ 最大規模の周参見や三輪崎ハウスは、60名以上の所属員がいた。もちろん、広島ハウスや伊予ハウスなど、和歌山県以外の出身者のためのハウスも存在していた。（同上書、11頁。）

²² 岡崎圭史「オーストラリアでのダイバー」『歴史と民俗 ありだ』第5号、88頁。

²³ 城谷勇、前掲書、44頁。

²⁴ 同上書、31頁。

²⁵ 岡崎圭史、前掲書、85頁。

²⁶ 城谷勇、前掲書、44頁。

²⁷ 同上書、44頁。

ところから木曜島娘達によくモテたが、時々度を過ぎては中井甚兵衛会長に呼びつけられ、大目玉を喰い、小さくなっていたものである。

この記述から、彼の「羽振り」のよさがうかがえるが、これは富太郎氏がダイバーとして活躍していたときのことである。また同時に、金遣いだけでなく、彼の人に対する気配り、すなわち「人を大切にしたい」という富太郎氏の性格を見ることができる。「他人には接待しても、されることを好まなかった」という気質は、戦後、ダイバー引退後にレインボーモーターを開き、島民だけでなく、真珠養殖に携わる日本人技術者の社交場を作った富太郎氏の性格をよく表している。

ここでいう「島民」は、いわゆる「白人」ではなく、主としてアイランダーと呼ばれる島嶼民を指す。富太郎氏は、ダイバーとして船に乗っていたときも、経営者である「白人」だけではなく、単純労働者としての「黒人」（島嶼民）とも分け隔てなく接していた。以下の文章は、端的にそれを示している²⁸。

遠い異郷で、しかも他所者の仲で揉まれて若い時代を忍耐よく生き抜いてきたこの人は、人生の酸いも甘いもよく弁えており、円満な人柄は『トミさん』の愛称で知られていた。ニューギニアやトレスの島々の黒人達に対しても優しく接し、決して叱りつけたりはしなかった。

ここでは、非常に温厚な「トミさん」の人柄がうかがえるが、当時、日本人は全体的にアイランダーとは良好な関係を保っていたようである。航海中は木曜島以外の島にも、飲料水や食糧の補給に立ち寄る必要性があったが、その際には地元の島嶼民と馬鹿騒ぎをした等の記録も残っている²⁹。明治期以降、このように日本人と島嶼民とのあいだで「仲間意識」が醸成されていったが、その背

景には、トレス海峡島嶼地域において両者が、数の面ではマジョリティでありながら、社会的、組織的な地位の面で抑圧されているマイノリティ同士であったことが影響していると考えられる。

3) 木曜島で生きる決意と日本への思い

富太郎氏は、戦中から戦後にかけて、先述のとおり、ヘイ収容所での生活を強いられた。しかしながら、富太郎氏が収容されていた第六収容所の収容人数は503名であったが、そのうち約六割の299名が木曜島関係者であり、かつ木曜島関係者の中でも六割以上が和歌山県出身者であったため³⁰、和歌山出身者にとっては、木曜島での人間関係を、そのまま収容所に持ち込むことができたといえるかもしれない。終戦後は、一緒に収監されていた仲間たちが日本へ送還される中、妻子が豪州国籍を有している富太郎氏は、キャンプに残り、木曜島への「帰郷」を果たす。

日本人としてひとり木曜島に戻った富太郎氏は、無数に残る日本人墓地の清掃を可能な限り継続していたようである³¹。木曜島に唯ひとり生残った日本人移民として、使命感のようなものを日々胸に刻みつけていたのであろうか。そのように考えると、彼が自らのなかにある「日本人」を意識したのは、もしかすると戦後、ひとり島へ戻ってからのことだといえるのかもしれない。

富太郎氏は、1978年に帰国した際には、すでに木曜島で生涯を全うすることを決意していたようである。この帰国は受勲のためのものであったため、もしかすると、この帰国こそが日本人としての自分自身を否応なく見つめ直すきっかけとなったのかもしれない。そのような日本人としての自分と木曜島に生活し続ける自分を、富太郎氏はどのように捉えていたのであろうか。戦前、同郷から木曜島に渡り、富太郎氏と同じ船に乗っていた城谷氏は、彼の滞在の最後を次のように記憶する³²。

明日豪州へ旅立つという（引用者注：受勲の

²⁸ 同上書、44頁。

²⁹ 同上書、22頁。

³⁰ 城谷勇「捕らわれの記」『歴史と民俗 ありだ』第3号、1991年、55頁。

³¹ 同上書、45頁。

³² 同上書、46頁。

ため日本に一時帰国中)…。そのときの淋しそうな顔は今も忘れられない。「君も達者でネ。またタースデーへ来なさいヨ」と言い、「これづっと付けてきたタイピンだが、プレゼントするヨ」と渡されたスポット真珠のタイピンが唯一の形見となって残っている。

今となっては想像の域を出ることはないが、当時 71 歳であった富太郎氏は、自らの存在を様々な面から見直していたのではないだろうか。木曜島への帰郷後、彼は、木曜島に居住し続ける最後の「日本人」ダイバーとして、在豪日本大使館関係者とも協力し、合祀慰霊碑の建立に尽力した。この慰霊碑は、日本人墓地が多くある丘の入り口にあり、富太郎氏は建立後も、毎年お盆の時期には真珠産業に従事する若者を引き連れて、慰霊碑や墓地の清掃をしていたという。これは、現在、金曜島で真珠養殖業を営む日本人に引き継がれている。

4. まとめと今後の課題

本稿では、以上のように、先行研究および文献記録・資料の分析から、主として第二次世界大戦前後の木曜島における日本人移民の歴史を、特にかれらの生活に焦点をあてて整理・提示するとともに、藤井富太郎氏個人の人生に注目し、彼の仕事、生活や価値観等を具体的に把握しようと努めてきた。この「全体」と「個」という、二つの視点から「時代」を見つめ直す作業から明らかにされたことは、母国・故郷を離れ、特に生命の危険を伴う職業（ダイバー）に従事する若者にとって、地縁・血縁によるつながりは大きく、それが意図的・非意図的に、かれらの生活の細部に影響を与えていたということである。また、仲間が一斉に帰国していくなか、現地の女性と家庭を築き、戦後ひとり木曜島に残った藤井富太郎氏の人生は、彼以外の「全体」に照らして明らかに「異質」であった。しかしもしかすると、この異質性こそ、戦後ひとりになってから、また晩年日本を振り返る機会を得たときに、富太郎氏が自身の「日本人」としての使命やそしてときにはそれに対して違和感をもつ要因であり続けてきたのかもしれない。

また、このような「内容」に関するまとめとともに、本稿を執筆していくなかで気づいた、方法論上の利点および課題も提示しておきたい。まず、

先行研究が示してきた、「歴史」的事実の限定性・限界に言及したい。これまでの研究では、例えば木曜島に住んでいた日本人ダイバーの「数」や「全体」に即しそれに配慮した記述が中心とされてきた。そのため、本論で試みた、藤井富太郎氏一人の生涯の追跡は、これまでの日本人移民の「歴史」に具体性を提供できるとの利点がある。

しかしながら、次に、すでに故人となった一故人の足跡の追跡には、限界もある。それは、本稿の課題でもあるが、残された資料・記録のみから特定の個人の人生をたどるという資料的制約ゆえ、往々にして、特定の文献等に頼らざるを得ないことである。

このような資料的制約を克服する試みとして、最後に、現在もなお生きる「記憶」を研究対象とする可能性を指摘したい。すなわち、現在に生きる日系人の記憶を紐解く作業により、過去のものとしての「歴史」の限界を克服することができると考える。具体的には、今後は、「日系人」の記憶のなかにある「日本人」を、かれらの目線で残す作業を進めていきたい。

木曜島では、日系二世、三世にあたる藤井富太郎氏の子ども・孫達が、「父親」「祖父」の記憶とともに生きている。また、金曜島には今なお日本人が経営する真珠養殖場があり、ワーキング・ホリデー中の若者が、日本から、今では非日常の経験を求め、定期的に訪れている。「全盛期」は、はるか遠くの昔に過ぎたとはいえ、日本人がそこに生きた痕跡は確かに今も存在する。その現在に生きる痕跡を、今後も丹念に拾いつつ、木曜島における日系人社会についても、今後、考察していければと考えている。

主要参考文献

- ・板倉勝高「豪州海域出漁民と母村の動向」『経済地理学年報』Vol.3, 1956 年。
- ・岩田孝「日本人真珠貝ダイバー友を呼び続けたが誰も還らなかった」『歴史と民俗 有田』第 12 号, 2002 年。
- ・岡寄圭史「オーストラリアでのダイバー」『歴史と民俗 ありだ』第 5 号, 1993 年。
- ・串本町史編纂委員会編『串本町史』資料編, 1988 年。
- ・串本町史編纂委員会編『串本町史』文書編, 1988 年。
- ・小西順子「木曜島の音楽：トレス海峡における音

楽と日本人コミュニティ』『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇』54, 2004 年。

- Armstrong, J., 'Aspects of Japanese Immigration to Queensland before 1900', *Queensland Heritage*, Vol.2 No.9, 1973.
- Ganter, R., 'Images of Japanese Pearl-Shellers in Queensland: An Oral History Chapter in Australia- Japan Relations', *Royal Historical Society of Queensland Journal*, Vol. XIV. No. 7, 1991.
- Ganter, R., Mixed Relations Asian-Aboriginal Contact in North Australia, University of Western Australia Press, 2006.
- Nagata, Y., 'Japanese in Torres Strait', Anna Shnukal, Guy Ramsay and Yuriko Nagata ed., *Navigating Boundaries: The Asian Diaspora in Torres Strait*, Pandanus Books, 2004.
- Ono, K. and Lea, J. P., 'Japanese Vision and Northern Australia: the Early Role of Japanese Settlers on Thursday Island', *Australian Planer*, Vol. 17, No.2, 2000.
- Sissons, D. C. S., 'The Japanese in the Australian Pearling Industry', *Queensland Heritage*, Vol.3, No.10, 1979.

参考 藤井富太郎氏 略歴

1907 年 12 月 10 日	和歌山県西牟婁郡有田村に出生
1925 年 (18 歳)	豪州木曜島へ渡航
1938 年 (23 歳)	ジョセフィン・チン・スーンと結婚
1941 年 (26 歳)	ニューサウスウェールズ州ヘイ戦争キャンプ収容
1961 年 (46 歳)	オーストラリア (英国) 国籍取得
1966 年 (51 歳)	オーストラリア (英国) パスポート取得
1976 年 (69 歳)	『木曜島の夜会』別冊文藝春秋にて公表 (主人公の名は藤井富三郎)
1978 年 (71 歳)	二回目のパスポート取得、受勲 (勲六等瑞宝章) のため帰国
1979 年 (72 歳)	妻ジョセフィン死去、ケアンズの石材会社に墓碑を発注 日本人合祀慰霊塔建設に尽力
1982 年 (75 歳)	ブリスベンの日本総領事主催の新年パーティに招待される
1986 年 (79 歳)	木曜島にて死去
1987 年	自宅前に銅像設置